

ドイツの教授、海外から本院で治療した経験

国際医療センター 蕭菁

今年の初め、ドイツからの患者は本院の田郁文教授を指名し、十二指腸腫瘍の切除を依頼しました。この患者は本院で治療を受け、本院の優れた医術と行き届いた医療サービスに深い印象を残しました。以下の内容は患者本人の治療の経過。

患者本人は放射腫瘍科の教授で、ドイツの University of Wurzburg に就職中です。2010年2月、ドイツの病院で検査によって十二指腸に腫瘍があると診断され、同年12月に追跡検査、十二指腸に血管変化があり、地元の医師は腫瘍を徹底的に切除する必要があるとあり、膵十二指腸切除手術（pancreaticoduodenectomy）を受けることを勧めました。教授は手間がかかり、合併症の発生率と死亡率が高い治療方法に対しては相当心配していたので、リスクが低くて保守的な治療法を受けたいと考えていました。しかし、腫瘍部位は膵頭（pancreatic head）と乳頭部（papilla of Vater）の近くで部分の腫瘍切除手術を施しにくい状態です。ゆえに、ドイツの教授は豊富な臨床経験を持つ医療チームを探し、なるべく保守的な手術をし、合併症が発生する可能性を低く、生活品質を維持できることを望みました。この患者は地元の医師と合意に達しませんでしたので、インターネットでこの方面の専門家を検索し、本院の田郁文教授が2010年1月に Annals of Surgical Oncology ジャーナルで発表した論文“Surgery for Gastrointestinal Stromal Tumors of the Duodenum”を読み、田郁文教授が豊かな部分腫瘍切除手術の臨床経験を持ち、患者の術後回復がいいことが知りました。ドイツの教授はすぐメールで田郁文教授と連絡を取り、双方も合意に達し、田郁文教授の専門知識と医療技術は高く評価されました。

ドイツの教授は台湾で講演と学術討論会に参加したことがあるので、台湾を知り、台湾の医療品質も認め、早速渡航しました。田郁文教授は病症を確かめるため、患者入院当日の午後内視鏡検査を手配しました。その検査は内視鏡室の王秀伯主任が担当し、詳しく検査と診療してからただちに内視鏡の方法で腫瘍を切除し、合併症も発生しませんでした。王秀伯主任は熟練した技能で患者に手術をさせずに済ましました。一日後患者は退院しました。こんな劇的な転化は患者の予想以上を超えました。腫瘍の病理結果は良性の脂肪腫瘍（benign lipoma）で、患者の喜びが想像できます。彼は本院の医師の優れた医療技術を褒め称え、台湾行きが彼にとっては蘇るような旅でした。ドイツの教授は帰国次第メールで感謝状を届け、感謝状及び医師との写真を公開することに同意しました。彼は自分の経験を生かし世界に台大病院の医療技術と品質を披露し、必要がある患者が台湾で診察できること願っています。